現場の奮闘 盾にする過ち

朝日新聞６月２日朝刊「多事奏論」。高橋純子・編集委員が「国難と政治の虚無」について、表題のように問題を鋭く投げかける。防衛省新型コロナ大規模接種の予約システムとメディアをめぐる問題である。抜粋して紹介する。

新型コロナワクチン大規模接種の予約システムには「欠陥」がある。そう調査報道した朝日新聞出版と毎日新聞に防衛省が抗議したことに呼応し、あの人が動いた。「朝日、毎日は極めて悪質な妨害愉快犯と言える」（安倍晋三氏のツイート）

あまりに奇天烈な難癖に驚き、マスクの下で音読してみる。メガネが曇る。大きな穴を見つけたら、「ここに穴があります（気をつけて）」と世間に知らせるのはメディアとして当たり前のことだ。それを愉快犯呼ばわりする前首相のやり口になんだかすっかり慣らされてしまった感があるが、本来とても異様なことである。

「敵」を名指すことで問題の本質から目をそらさせ、失政をごまかし、仲間内の結束を高めて政権の底支えにつなげる。その便利な敵役に使われてきたのが一部のメディアだ。権力の目の敵にされるのは、不愉快だけれどある意味名誉なこと。寵愛されるよりよほど胸を張れる。

なにより今回、批判の口火を切ったのが岸信夫防衛相だったことにはもっと関心が払われていい。「この国難ともいうべき状況で懸命に対応にあたる部隊の士気を下げ、現場の混乱を招くことにも繋がります」

国難や士気といった言葉を、実力部隊を率いる防衛相がもとより安易に振り回すべきではないと私は思うし、ましてや個別メディアの批判に用いたとなれば警戒心を抱かずにはいられない。自衛隊の「懸命な対応」を、政治が盾に取ってはいけない。ましてや矛にするなどあってはならない。これが防衛省・自衛隊ではなく、たとえば厚生労働省の失態だったら、こんな言い分が通ると踏んだだろうか。普通に謝罪し粛々と対策が練られたのではないか。厚労省の役人であれ自衛隊員であれ現下の奮闘に序列などないはずなのに、なんだろうこれ？

為政者が何を利用し、私たちは何に利用されようとしているのか、目の前の危機対応に追われて視野が狭まり、より大きな危機を呼び込んではいないか。よくよく注意が必要なことは歴史が教えてくれている。

コロナ禍にあって思うのは、安倍政権の８年弱はやはり「痛手」だったということだ。政治も行政も批判に正面から向き合わず、うそや詭弁の糸で紡いだ無謬の繭の内にこもり、甘え、甘やかされてきた。この１年余の間、目の当たりにした後手と無軌道は その結果とみるべきだろう。

ナンバー2 として権勢をふるっていた人は首相となったいま、頼りないを通り越して痛々しい。

（2021年6月４日）